

攝理と自由

—プロチアの辯論論について—

立花勝……………一

芭蕉文學の奥底にあるもの……………

—奥の細道を中心に—

岩見護……………三〇

淨土教的實踐の問題……………

—證空師の行成論の示唆について—

藤原幸章……………四〇

書川仁岳の異義……………

—その哲學的根據を中心として—

安藤俊雄……………五二

恩師朝永三十郎先生……………

金松賢諒……………六二

# 化度寺邕禪師塔銘校字記

中田勇次郎

化度寺故僧邕禪師塔銘の碑は、唐の貞觀五年十一月十六日邕禪師入寂の後、長安の南山鷓鴣阜、信行禪師靈塔の左に建立されたものである。唐の李百藥の撰文、歐陽詢の正書として、書法の上では古來著名なものであるが、近年、三階教の史料として詳しく紹介された論著があり、この碑の内容はそれによつて知ることが出来る。

この碑は原石が宋時代に滅んでしまつたと言はれてゐるとほり、その整拓の傳はつてゐるものは未だ聞いたことがない。今見られるのは舊拓本を剪装した碑帖の傳世品で、このまゝでは碑の形式もよく解らないし、又、碑文にも殘缺したところや、漫漶したところがあつて、その部分の文字には未だ校訂しなければならぬものが多

1 (中田) 從來、この碑について最も精しい考證をしたのは、清の翁方綱である。かれは書法においては化度寺碑や廟堂

碑を學び、特に化度を楷法第一として最も之に傾倒し、畢生の力を竭して之を研究した人である。かれは乾隆四十五年、蔣愚亭舊藏の一本を手に入れた頃から、絶えず諸本を歴訪借觀し、范氏書樓原石本としては、所藏本のほかに顧氏玉泓館本、王弇州第一本、同第二本、鮑氏本を、宋翻本としては王孟揚本、陳彥廉本、吳門繆氏本などを次々に臨摹對校し、嘉慶五年に至つて、遂に「范氏書樓三段殘石之圖」を完成した。この圖は今見ることはできないが、これは恐らく原石の覆元圖に、石碑が三段に斷裂してゐる痕跡を圖示したものであらう。今、手近かに見られるものとしては、別に同じく翁方綱の自筆の「化度寺碑全圖」(博文堂影印化度寺碑來去原委各札所載)があり、この碑の形式を窺ふことができる。

この碑圖によると、この碑は、三十四行、行三十三字、計一千八十九字、(但しこの中に缺文を含む)、といふ形

式になつてゐる。碑の寸法は、翁氏の説では凡三尺としてゐるが、實地に拓本を測量してみると、碑文の文面は高さ約二尺三寸ほどになり、巾は行数から考へてほどこれに準ずるものと思はれる。

この行格を定めるのに、翁氏が非常な苦心を拂つたことは、かれの諸跋によつてよく窺はれる。實地に就き、この行三十三字を玉泓館本を例にとつて實驗してみると、拓本の墨色や剪装の痕跡が、びつたりとこの行格にあてはまる。又、鮑氏本の帖内に、翁方綱が三十四行の各行の改行の場所と闕文を注記してゐるのによつても證せられるし、他の諸本について、その剪装の痕跡の明らかなものについて調べても、よくこの行格に符合し、この説の誤でないことがよく解る。一行の字数が定まると、行数が自然に定まり、これで碑の形式がととのふことになる。

碑類は宋拓日本傳本の帖首に「化度寺碑」四字二行の大字の篆題があり、陳彦廉本の明の李東陽の篆題もこれと同じ形式である。一説にはこの四字を碑額としてゐるが、一體「化度寺碑」といふ名稱は立碑當時にはあり得ないものである。この名稱は、この碑が歐陽率更の書として天下に傳へられ、歐陽の「醴泉銘」、虞永興の「廟

堂碑」などといふ稱呼と同じやうに、その碑名が通俗化して作られたものであらう。これを著録に照してみても、北宋の黃山谷全書に「題化度寺碑」とあり、晁无咎題跋に「跋化度寺碑後」とあり、宣和書譜卷六陳景元小傳に「化度寺碑」の語が見えるのが比較的早いものであり、これ以前の著録にはこの稱呼は見當らないやうである。従つて「化度寺碑」といふ名稱は、宋翻本が刻されるとき、當時の通稱に従つて新しく題されたものと考へる方がよいであらう。結局、碑額については今はよく解らない。

翁方綱に次いで、吳榮光にも、この碑の全圖があり、その小跋に「嘉慶戊辰長至前五日南海吳榮光以宋拓本參校書此附宋慶曆間拓原本」とあるが、この圖は翁氏碑圖と全く同一のものであり、陸增祥の八瓊室金石補正にも、吳荷屋が所藏の宋拓本に翁氏碑圖を補つて筠清館金石記に編入したと言つてゐるから、吳氏は自分でこの圖を作成したのではなく、實は翁氏の圖を借用したのであらう。

今日では、翁氏の「化度寺碑全圖」がもつともよく整理された覆元圖であらう。しかし、これにも尙、數十字の缺文があり、存字にも疑問のあるところがあるので、

どうしても嚴密な校訂を経なければ讀むことができない。そのためにはやはりできるだけ多くの舊拓本をその資料として求めなければならぬ。

ところが、幸ひ本學圖書館には、故禿庵上人の御秘藏になつてゐた宋拓本が架藏されてゐる。この本は上人の愛玩の品として秘藏されてゐたため、今まで一般には容易に拜見できなかつたものであるが、かうして公庫の所藏に歸し、自由に閱覽することができるようになつたことは、まことに喜ばしいことである。この本は翁方綱の舊藏本として著名なもので、帖内には方綱自筆の題跋が長短大小百五十則餘記入されてゐる。この題跋は、乾隆四十五年二月、かれがこの本を手に入れてから、嘉慶二十二年五月、即ちかれが卒する前年に至る三十八年間にわたつて記入されたもので、その大部分は翁氏の復初齋集に掲載されてゐないものである。

ところへ、今春二月初旬、これも翁方綱が王孟揚本を擧揚した自筆の「翁覃溪先生手摹化度寺碑底本」一帖が本學圖書館に歸した。この本にも、かれの文集に見えない題跋數則があり、この本によつて併せてこの碑の事情を更に詳細に知ることができるとなつた。

そこで以上の兩帖を根本資料とし、その上、他の諸本

を參考した結果、この碑の拓本の種類と系統をほゞ明らかにすることができた。更に、そのことによつて翁方綱の拓本の鑑定を是正することもできた。この論文はかうして系統立てられた拓本を基礎にして、翁氏の化度寺碑全圖の校訂をこゝろみよとしたものである。以下、先に拓本の種類と系統とを解説し、次に校字記を記すこととする。

\* 神田喜一郎博士「三階教に関する隋唐の古碑」、佛教研究三、三、三〇四、四〇二。  
矢吹慶輝博士「三階教の研究」

拓本

この碑の拓本については、唐原石拓本、宋翻本、其他の摹刻本の三種類に分つて考へることが出来る。以下一々について、碑文の校訂の資料としての性質内容を述べることとする。

唐原石拓本

1 敦煌所出殘本

敦煌から發見された殘本で、全十二頁あり、前二頁はベリオ氏が、後十頁はスタイン氏が將來されたものである。毎頁四行、行五字、計二百三十六字。これが原石の唐拓本であることはすでに學界において認められてゐる。

る。従つて、この碑の拓本の研究は、先づ第一にこの本を標準として行はなければならない。

この本は、文字の漫漶したところの殆んど見られない初拓本であるが、その文章を讀むと、當時行はれた耕體文で書かれてゐるので、その規則正しい對句の法によつて、拓本に缺文のあることが解る。同時にその缺文の數もほど推定することができる。又、拓本の剪裝の痕跡によつて缺文の場所を求めることもできる。この缺文にどういふ文字があつたかといふことは、下に掲げた宋翻本をみると、この缺文の部分がほど埋められてゐるので、参考することが出来る。今、便宜上、翁氏碑圖に據つて、この本の缺文を示すと、左の通りで、凡て三十五字ある。

- 第一行 子李百藥 歐陽詢書
- 二 山川之 研其慮者百
- 三 博而無 斯蹟或
- 四 之譏
- 五 德其
- 六 崑
- 七 野大啓 曠曠
- 八 其昌 博

は、翁方綱の響搗本に、その文字の剝蝕殘缺した痕跡が一々克明に圖示してあるので、それを、翁氏の定めたごとく、三十四行、行三十三字に配置して、この碑の覆元圖を作つてみると、碑全體の上中下三段に斷裂してゐる痕跡が判然とあらはれる。そして、これに敦煌本の缺文を當てはめて見ると、その大部分は、その斷裂した部分に當つてゐることが、一目にして了解される。そこで、敦煌本の缺文は碑面の斷裂によるものであることが、王本によつて始めて了解される。これによつて、原石の三斷裂は敦煌本が手拓された時、恐らく唐時代に於て行はれてゐたものであらうと推定される。

解籍の化度寺碑跋に、南宋の范諤の隆慶中の跋語を引用して、北宋の慶曆初年、その祖先の范雍が、南山の佛寺でこの碑が敷石になつてゐるのを發見し、その貴重なものであることを告げたので、貪慾な僧侶が、碑中に賣物があるかと思つて破壊したので、碑が三斷されたといふことを記してゐる。これについては、王澐の虛舟題跋や歐陽輔の集古求真にもその事實を疑つてゐるが、これがやはり虚構であることは、敦煌本を基にして考へた上記の方法によつて、たやすく證明することができる。もう一つ考へなければならぬことは、この三十五字

この三十五字の缺文のほか、この本の特徴と思はれる點は、第一行の「塔銘」二字の右が微かに洩してゐること、「製」字の波磔が中途で切れて缺けてゐること、第二行「秀」字の右上が洩してゐること、第八行「葉」字の下部、第九行「宗」字の下部がいづれも微し洩してゐることなどである。要するに以上の諸點が唐拓本の證據となるもので、他本と對校するには、これらの諸點に注意しなければならない。

それでは、この三十五字の缺文がどうしてできたかといふことを考へてみる。それについては、この敦煌本を次に掲げる王孟揚本と比較して見ると、王本においては、第二行の「研」字と、第三行の「斯」字が殘缺して半字を存し、第七行の「曠」字が二字存してゐるほかは、すべて敦煌本と同様に缺文となつてゐる。其の他、こまかい點について一々調べてみても王本は敦煌本と一致する。これによつて、王本が敦煌本と同石であることが、ほど認められる。従つて王本も唐拓本であると言つてよいであらう。

ところが、王本は存字九百三十五字で、敦煌本が僅に前九行二百三十六字を存してゐるのに比し、碑全體三十四行にわたつて文字が存してゐる。のみならず、王本の缺文には、宋翻本では文字が埋められてゐる。これは、何に本づいて埋めたのであらうかといふことである。唐の未斷の拓本があつてそれによつたか、或は寺傳の記録などを参考したか、或は意を以て文字を補つたか、あるひは、これらの方法を混用したか、この何れかであらうが、今このいづれであつたかを知ることは困難である。後に校字記において、宋翻本の成文の中、疑問の存する部分ができるかぎり訂正して見るつもりである。

濱田耕作博士「大英國博物館スマイン氏發掘品過眼録」、東洋學報八ノ一

神田喜一郎博士「化度寺塔銘について」、支那學二ノ九

禿庵文庫所藏化度寺塔銘寫真十二枚

中國景印煥煌石室所藏唐拓化度寺碑殘本一冊。

墨林星鳳 羅振玉景印

石室秘寶 有正書局印

2 王孟揚本

元末明初の人、王儼、字は孟揚、號虛舟、の舊藏本。乾嘉の頃、陳崇本伯恭が所藏し、嘉慶八年癸亥、陳氏から成親王に歸した。乾隆五十四年冬十二月、翁方綱が商邱の陳伯恭から借觀し、響搗本を作つてゐる。即ち、「翁覃溪手模化度寺碑底本」がそれである。原拓本は見

ることができないので、今しばらく、底本の翁跋による  
と、この本は題籤に「唐揚」とあり、冊尾に王虚舟孟揚  
の印がある。全九葉半、每半葉六行、行十字、計九百三  
十五字(翁氏の算定による。底本について實際に當つて  
みると、完好な文字九百十五字、他は残缺してゐる)中  
間に缺文がある。

この本が唐原石拓本であることは、熈熈本の條に述べ  
たとほりである。この本の缺文を熈熈本の場合と同じ  
く、翁氏碑圖に本づいて示すと、左のごとくである。但  
し、第九行までは前に掲げたから、こゝでは省略する。  
尙、括弧内の文字は、多少残缺して完好でないものであ  
る。又、翁氏碑圖において缺文となつてゐる部分は王本  
においても同様であるから省略した。

- 第九行 爰自(弱) 一〇 世傳儒
- 一一 博 群書 一二 海之
- 一三 (蓮)親 一五 往林慮山
- 一七 唯之(衣字上) 一八 (匿)之(驚字下)
- 一九 (絶)恭(釋) 二〇 (實)命(世)(以)
- 二一 (禪)曰(多)立行宜以
- 二二 方(禪)字第二脩(苦行開皇)
- 二三 相 二四 六日 以

に李東陽の「化度寺碑」四字の篆題がある。全十葉半、  
每半葉六行、行九字、計九百餘字。印記は非常に多い。  
後に元人十三跋、明人二跋がある。但し、この跋尾は、  
後に前帖から切り離されて、眞定太守邱東河(鐵香)の  
所から翁方綱に歸し、方綱は又之を所藏本の後帖とし  
た。

(李東陽懷麓堂集、郁氏齋畫記、安岐墨緣集、翁覃溪手摸  
化度寺碑底本、佩文齋書畫譜五四陳寶生小傳)

4 吳門繆氏本

清の康熙中の人、繆曰藻、字は文子、號南有居士、の  
舊藏本。翁方綱が嘉慶四年冬、何夢華(元錫)からの書  
信によつてこの本を知り、王本、陳本と同石とした。こ  
の本はもと元の朱益之春暉堂の所藏であつたが、明に  
入つて宣宗の時、晉藩の有に歸し、甲申(崇禎十七年)  
陪京の際人間に散落した。清朝になつてから、繆文子に  
歸し、次いで、嘉慶八年の頃、吳門の富家、歙人汪氏に  
歸したといふ。外籤は王澐の書で「宋揚唐歐陽率更化度  
寺碑、虛舟審定」とあり、内籤は元の鮮于伯機の楷書で

「唐歐陽信本化度寺碑」とある。全九葉半、每葉十二  
行、行十字。中間に缺文がある。字數は九百二十餘字。  
末尾に、元の鮮于樞、錢良右、明の張紳、東陸商の長跋

- 二五 送靈塔 二六 (塔之)(而)
- 二七 嚴 雖 二八 常卑群屈已(彌)
- 二九 芝之致敬人(慕豈) 拾(佩)
- 三〇 而已式昭 三一 綿邈神理希
- 三二 蒙悟道捨俗歸 結構
- 三三 窮巖留連幽谷 三四 妄泡電同奔遠 那

右に掲げた殘缺文の中、右に線を引いたのは次の陳彦廉  
本に文字の存してゐるもので、即ち、陳本によつて補ふ  
ことのできるものである。其他の唐拓本によつて補ふこ  
とのできるものもあるかも知れないが、大體において右  
の缺文の大部分は、斷裂のために破壊した文字が宋翻本  
によつて補はれてゐるものである。かうして補はれた宋  
翻本の文字の是非については後に校字記において述べる  
こととする。

3 陳彦廉本

元人陳實生、字は彦廉、春艸堂の舊藏本。明時代にな  
つて項墨林の收藏に歸した。翁方綱が嘉慶四年己未八月  
九日、友人から借觀し、鑑定の結果、王孟揚本と同石で  
あるとした。翁氏が王本の響揚本に、朱筆で王本との異  
同を校補してゐるのによつてこの本の大體がわかる。こ  
の本は、宋標の摺冊、高さ九寸六分、巾七寸一分。帖前

があるといふ。印記は非常に多い。この拓本の特徴は、  
碑の首行の「塔銘」二字が半泐し、銜の「右庶」二字と  
「製文」二字を存し、「率更令」の下の二字は已に泐し、  
その下はみな斷缺してゐる。第一行の「度」字は蔣春泉  
本(王弁州第一本)に較べて微し大きいといふ。これら  
の諸點は大體において唐拓本と一致してゐる。

(翁覃溪化度寺碑底本、蘇齋題跋)

5 潘文勤公本

清の潘祖蔭の舊藏本。羅振玉が吳湖帆(萬)の所藏し  
てゐるのを觀て跋を作り、唐石宋拓としたもの。字數は  
九百餘字、末尾に翁方綱の跋があるといふ。羅氏は自跋  
の後に、この本と全唐文とを對照した校字記を書き、全  
唐文の原本はこの本であるといひ、又、熈熈本と比較し  
て、この本が唐原石拓本であることを考證してゐる。こ  
の本の羅氏の校字記を王本と對校して見るとほぼ一致す  
るので、あるひはこの本は王本そのものではないかと疑  
はれるが、多少相違する點もないでもなく、翁氏の跋を  
一見しないと何とも言へないので、しばらく別本として  
掲げておく。(羅振玉、遼居乙藁)

以上の、王・陳・繆の三本および潘本は、いづれもそ  
の特徴が熈熈本と一致するといふ點から觀て、唐原石拓

本としてよいものであらう。

宋 翻 本

宋代の著録題跋に見える化度寺碑に関する記事はかなりあるが、翻刻について記してゐるのは、先づ北宋末の人、蘇東坡の門人で、元祐黨人の一人であつた李之儀の姑溪題跋に、

化度寺碑はもと西京の范忠獻(雍)の家に所藏されてゐたが、今は破壊して殆んど摹印に勝へない。この碑も近ごろ摹刻したもので、補苴してどうにか完全なものにすることができたものである。

と言つてゐる記事である。この記事において、この碑が范雍の家にあつたといふことは、宋の治平三年の序文のある朱長文の墨池編にも、この碑が西京范雍の家にあつたことを記してゐるし、解縉の化度寺碑跋にも、隆慶中の范諱の跋を引いて、范雍が慶曆の初年南山の佛寺でこの碑を發見し、持ち歸つて里第の賜書閣に置いたといふことを記してゐるが、このいづれとも一致する。

李姑溪がこの題跋を書いたのは、およそ北宋の末葉であらうが、その頃に原石は殆ど摹印に勝へない程度にまで漫漶剝蝕してゐたのであるから、原石に代るものとして摹刻が作られてゐたことは自然にありうることであらう。

らの諸本と宋翻本との關係については、古人の説もあるが、實際にはまだよく解つてゐない。實際についていへば、今、宋拓の翻刻本と思はれるもの二種類ある。以下その各々について唐石本と同様に解説することとする。

第一 種

1 翁覃溪所藏本 禿庵文庫本

明の章藻の墨池堂選帖卷三に摹勒上石されてゐる化度寺碑の祖本である。清初、蔣宗元が所藏し、蔣から朱與白、朱から汪中に歸してゐたのを、乾隆四十五年二月、翁方綱が門人江秋史(德量)を介して入手し、爾後卒するまで座右に愛玩したものである。道光中には翁蘇齋の門下の葉志詒が所藏してゐた。其後、輾轉して吾國に渡來し、仄聞する所によると讃岐大西氏から故禿庵上人に歸し、今、本學禿庵文庫に所藏されてゐるのがこれである。

外籤は端方の書で「化度寺萬禪師塔銘」、内籤は數葉あるが、翁覃溪の書したものは、「化度寺萬禪師塔銘北宋拓本元初裝冊」とある。全十三葉、每葉四行、行十字、計四百九十五字(翁の算定では四百七十三字、その中、半幅の者十三) 賈紙を用ひ、拓の墨色は絶だ佳い。

る。その摹刻は范氏書樓の原石を基とし、舊拓を參考して補苴されたものであらうと想像される。

又、南宋理宗朝の淳祐年間の頃に著はされた趙希鵠の洞天清祿集に「化度寺碑が北方に在る」といひ、又「會稽の高續古(似孫)の家に重模化度寺碑があり、咄々として眞に逼る」と言つてゐる記事がある。北方に在るといふのは、この碑の原石が北方に現存するといふ意味で言つたのかも知れないが、この時には恐らくもう原石は滅んでゐたであらうから、北方にあるといふからは、やはり摹刻があるといふことになるであらう。高氏の家に重模化度寺碑があるといふのは、高氏自ら摹刻したかどうか解らないが、重模した碑がその家にあると解してよいであらう。そして、咄々として眞に逼るといつてゐるからには、その摹刻は非常に精巧なものであつたであらう。

元末明初になると、宋濂が化度寺碑跋に、「萬禪師塔銘と醴泉銘には翻刻が多い。南本は瘦に失し、北方は肥に失し、殊に精絶の本がない」といひ、南北瘦肥の別を述べてゐる。又、解縉の跋および楊東里(士奇)の跋には西安府學本があることを述べ、楊東里は別に杭州明慶寺の翻刻本を人から惠贈されたことを述べてゐる。これ

帖内帖尾到るところに翁方綱自筆の題跋が約百五十則あまり記入されてゐる。後に蔣衡、蔣宗元、潘寧、羅兩峯、江炳炎、喬崇脩、黃易等知名の士の題跋があり、その他に、楊守敬、李葆恂、陳惟彥、李宗澗、朱汝珍の題跋もある。

この本は翁方綱の化度を楷法第一とする説の模範となつたもので、かれが范氏書樓原石拓本の最先最眞のものとして鑑定したものであるが、今日では燉爛本が發見されたので、この本は宋翻本であるとせざるを得ないであらう。しかし、この本は宋拓の傳世の名品であることは言ふまでもなく、書品の上においても唐拓に比して又別の一種の高い品位を備へてゐる。のみならず、その中に記入された無数の題跋には、書學に益するものが極めて多い。この意味から言つてもこの本の生きた史料としての歴史的價値は、他本の追従を許さぬところである。

翁氏の跋によると、この本には陳彦廉本の後にあつた元人十三跋が後冊として附録されてゐたといふことであるが、今はなく、その後の消息もよく知らない。

(日本傳本の康有爲跋に、有正書局印翁方綱臨本字數四百九十五字のものがあるといふ。字數がこの本と一致するので、或はこの本の臨本の景印本ではないかと思ふ。)

2 顧氏玉泓館本 胎育書本

もと明の李文正公(東陽)の家にあつたものを、顧從義が装標を改めて珍藏してゐた本である。清の嘉慶十二年丁卯、吳榮光に歸し、次いで嘉慶十四年己巳、成親王に善價を以て讓渡された。時に、成親王は一本を臨して吳榮光に贈つた。(この臨本は文明書局印南海伍氏本の後に附録されてゐる影印によつてわかるし、又、有正書局の印本もあるといふ。)玉泓館本は一に胎育齋本とも稱せられるもので、敦煌本が発見されるまでは、范氏書樓原石本として天下に喧傳された本である。翁方綱は嘉慶十三年戊辰四月に、吳榮光からこの本を借觀し、鮑氏本と對校した結果、この本を慶歴の時の初拓、鮑本は宣和の時の拓であるとした。大正二年大阪博文堂から影印本が出版された。冊尾に羅振玉の跋があり、この本の來歴が精しく記されてゐる。後冊として「化度寺碑來去原委各札」一帖が附録され、翁方綱、桂芳、英和三家の書札が收められ、この本の讓渡される経緯がよくわかる。

全十二葉、每葉五行、行十二字、計六百八字(成親王の算定)、帖内に翁方綱の跋があり、冊尾に顧從義の二跋、翁方綱、成親王の跋がある。玉泓館本の題跋については、も一つ附け加へなければならぬことがある。そ

れは、明治年間の書家田口米舫が化度の一本を所蔵してゐたらしく、その影印した本があり、わたくしの知人の須羽水雅君がその影印本を所蔵してをられたので、借觀することができたが、その化度碑は所謂横石本で、「李百葉」の百字が伯に作つてあるのでそれが解るし、碑文も金石粹編所載のものと同じく、後世の補葺の加へられたものであるが、その帖の前後の題跋をくはしく見ると玉泓館本の題跋である。帖前には翁方綱の玉泓館本題詩と英和が吳荷屋に與へた尺牘一通、帖後には、翁方綱の玉泓館本と梁蕉林(清標、號棠村)所藏本とを同賞した時の六首の詩題、嘉慶戊辰二月十日の成親王の跋、(この跋は玉泓館本を觀賞した跋で、この翌年にこの本を手に入れたのである。)英和の吳荷屋宛尺牘一通、吳榮光が玉泓館本の後に附録したと言ふ自筆の化度寺碑全圖がある。これらの諸題跋は博文堂で影印されたものには附いてゐない。諸跋の眞偽はともかく参考として附記する。

3 王弁州第一本 蔣春皋本  
明の王世貞が所蔵してゐた三本の中の第一本で、清の繆曰蓀が所蔵し、次いで蔣春皋に歸した。翁方綱が吳門繆文字本と稱してゐるものに、前出の唐石本とこの宋翻本との二種類がある。この本は字數が少なく、十四葉、

計二百三十三字である。(泉州山人四部書目録)

4 陸謹庭本 王弁州第二本、臨川李氏本

王世貞所藏本の第二本で、清の嘉慶六年、陸恭、字は孟莊、號謹庭、に歸した。後、臨川の李宗潯に歸したので臨川李氏本として名高い。題籤は王夢樓の書で「宋揚化度寺碑、松下清齋鑿藏(陸恭の書齋號)夢樓」とある。全八葉、每葉四行、行八字、計二百二十六字。前に李宗潯の摹寫した、李西涯の「化度寺碑」四字の篆題がある。帖内に、翁方綱、顧編、乙酉秋臨川李宗潯の題跋がある。後に、陸深、胡樸宗の二跋がある。又、翁方綱の陸謹庭宛尺牘一通、王文治、顧編、劉石庵の諸跋および李宗潯三跋等がある。(泉州山人續纂、復初齋集外文卷三、跋陸謹庭化度真本。有正書局景印臨川李潯湖本。清雅堂影印未拓化度寺碑三種之第三。)

5 鮑氏本 南海伍氏本

清の繁昌の鮑氏東方の所藏本である。嘉慶十三年秋、廣陵の洪瑩、字は賓華、號鈴齋に歸した。その間、翁方綱が嘉慶六年、十三年、十七年の三回にわたつて借觀し、諸本と對校してゐる。後、南海伍氏專雅堂に歸し、何紹基が鑑賞して海内第一本と稱し、題籤をしたためた本で、一こ有每五氏本といふ。この本は翁氏の跋に言

つてゐること、翁本に比して拓は後で、泐壞は甚しいが、字數は多い。全二十葉、每葉五行、行十一字、但し、二十葉の中二葉は補脱したものである。字數約六百字。帖の前に、鄧石如、何紹基、翁方綱、秦恩復、趙懷玉等の題跋があり、帖内には翁覃溪の書入があり、帖後に潘寧、翁方綱、王文治、吳榮光、伊秉綏、英和、王宗誠、洪瑩、葉志詵等の題跋がある。附録として、成親王が玉泓館本を臨書した臨本とその成親王の跋および煇煌本二葉が加へられてゐる。尙鮑本の碑文は、翁方綱の化度寺碑全圖に、藍點を施されて表はされてゐるのによつても、概要がわかる。

(復初齋集卷二十二、跋吳門鮑氏化度寺碑。民國九年六月、文明書局影印再版、化度寺碑南海伍氏本。)

6 楊氏望堂金石初集本

清の同治十一年、楊守敬が雙鈎の形式で、望堂金石初集に收めてゐる本である。十年辛未秋八月十六日の自跋がある。全八葉半、每半葉六行、行十一字、字數は吳荷屋本に比べて四十一字少ないといふ。約五百六十七字。吳本と對照すると、漫漶した所がよく一致するが、拓は吳本より後であらうし、鮑本より前であらう。この系統の宋翻本には、をはりの銘の部分の文字が無いものがあ

るが、鮑本との本にはこの部分に文字が存してゐて、且つこの本が鮑本に比べて字數が多いことは注意すべきである。

以上の六本は、手拓の前後、字數の多寡はあるが、いづれも同石から出た拓本である。この中、望堂本を除いたあとの五本はみな、翁方綱がこの碑の比較研究に用いたものである。翁氏の説によるとこの五本が范氏書樓の原石本であり、前掲の王、陳、繆三本は宋初翻本であるが、この説は敦煌本の出現により訂正せざるを得なくなつたことは上述のとほりである。

しかし、この系統の宋翻本は、翁方綱が化度を唐楷における淳古無上の品とし、歐陽書の醜泉銘と比較して、古來、化度は醜泉に勝ると謂はれてゐるが、王虛舟はこの説を篤論ではないと言つたのに對し、化度勝醜泉論二篇をしたためて王氏の説の非を説き、遂には唐楷に於て晉望に入るものは化度のみ、化度こそは古今における楷法第一の神品であるとして激賞した基本となつた拓本であるだけに、さすがにその書品の高さに於ては、一見してその點畫の中に敦煌本などと稍趣を異にした一種の風神を備へてゐる。そこで特に、書品を論ずるといふ段に

なれば、又この間に別の問題として取扱はれなければならないものがあるであらう。これについては尙、今後の研究に俟つものがあると思はれる。

たゞこの系統の宋翻本としての性質を考へてみるに、この本は比較的數が多く残つてゐること、そしてその碑文がいづれも甚だしく漫漶してゐること、およびその碑文の残つてゐる部分が唐石の三段の形式に近く、やはり一塊々集團的に残つてゐる點などから考へ合せると、解籍の跋に引用した范諤の跋に、

范氏賜書閣に置かれた碑石が、靖康の亂の時に、諸父が之を井戸の中に隠したが、戰後、好事者が之を取り出して、數十本の拓を取り、遂にその石を破壊してしまつた。今浙右に散らばつてゐるのは皆これである。と言つてゐる記事と暗合するやうにも思はれる。即ち、この系統の本は、北宋における范氏書樓原石の摹刻本（やはり唐原石とは言へないであらう）で、南渡の際、その斷裂破壊した殘石から取られた多くの拓本が流散したのではなからうか。かう考へると、この系統の本を從來どほり范氏書樓本と稱することは、必ずしもいはれないとは言へないであらう。

第二種

日本傳本  
民國二十一年十二月上海碧梧山莊印行「晉唐楷法大觀」所收の本により見ることが出来る。この本は、帖首に「化度寺碑」四字二行の篆題がある。前出の陳彥廉本の李西涯の篆題と同一形式である。臨川李氏本の帖前に、李宗瀚が李東陽の篆題四字を鈎摹したものが載せられてゐるが、これを日本傳本のものとして對照すると全く同一筆蹟である。この篆題を宋翻とするには疑問がある。

全十二葉半、每半葉五行、行九字、字數一千五十五字。帖末に「清住禪院文庫」「二尊院」「岸本家藏」の三つの印記がある。清住禪院文庫は、京都建仁寺塔頭清住院（開山は蘭州良秀、至徳元年入寂）の文庫であらう。二尊院は京都嵯峨小倉山の二尊院であらう。岸本家藏は徳川期の藏書家、岸本由豆流の藏書であらう。後に、元の歐陽玄の跋があるが、この跋文は元人十三跋中の歐陽跋と略同文で、十三跋には年記があるが、これには年記がない。この跋の書風を見ても元人とは思はれず、恐らくこれは偽作であらう。又、光緒丁酉秋楚南文啓祥、甲子三月南海康有爲、壬申冬日梁溪周鍾麟の三跋がある。帖内の渤海に、蔣宗元、翁覃溪、梁章鉅等の印記があるが、これも恐らく偽作であらう。この本は康跋によると元時代

に日本に流入し、清季末葉に再び中國に戻り、輾轉して碧梧山莊に歸したといふ。とにかく、日本の三つの印記から考へても、古く吾國に渡來した舊拓本であることは間違ひはないやうである。

この本は、康跋、周跋に唐原石拓本としてゐるが、敦煌本と對校してみると、缺文が一致しない。書の風韻は第一種の宋翻本と非常に近いが、詳しく照合してみると、別石である。即ち、第一種の宋翻本とは又別種のやはりこれも宋翻本ではないかとおもふ。しかも、これは唐拓本に就いて翻刻したらしく、唐拓の特徴をよく備へてゐること、字數が千を越えるといふ、諸本の中でも最も字數が多いこと、文字はすべて完好な初拓本であることなどからみて、宋翻本としては最も好條件を備へた善拓と稱してよいものである。康南海の跋に、若し唐拓の舊本に非ずんば、安ぞ此の如きの完全なる精本あらんや、といひ、夫れ、墨運輪廻心、顯晦時あり、此の如き希世の寶の遠く千載に速んで始めて克く大いに光明を放つは、豈に藝林の佳瑞、雜林の奇遇に非ざらんやと言つてゐるのも無理はない。

其の他の摹刻本

前に掲げた二種の宋本のほかに、摹刻本としては、墨池堂帖本、横石本、薛元超本、覆横石本（即ち直石本）、覆薛元超本がある。これらについては、すでに翁方綱の説があり、これらの中では墨池堂帖本が最もよいと言つてゐる。墨池堂本は明の萬曆三十四年丙午春、章藻、字は仲玉が墨池堂選帖卷三に摹勒上石したもので、その祖本は後に翁方綱の所蔵に歸した本であることは前に一言したとほりである。横石本は王昶の金石粹編の據つた本で、碑首の「李百藥」の「百」字を伯に作つてゐるのが特徴である。これのみならず、この本の碑文の錯誤の甚しいことは、すでに前輩の詳しい校訂を経てゐる。薛元超本も、「李百藥」の代りに、集字聖教序の「庶子薛元超」を借りて填入したもので、その碑文の誤謬の程度も想像に餘りがある。これらの摹刻本は碑文の校勘にはあまり役立たないやうである。その他、海寧陳氏翻刻本、陳恩園秀餐軒本（但し、秀餐軒帖には化度寺碑はない）、南海吳氏重刻本、成親王註本、翁氏重摹本、海山仙館本等があるといふが、これらについては後日の研究に譲ることとする。

翁覃溪先生手摹化度寺碑底本

翁方綱が王孟揚本を嚮揚した自筆の稿本である。同治

中、葉東卿志説が所蔵してゐたもので、その時にはもう

燒殘した本で、陳寅生が儘餘の殘本を改装してゐる。嚮揚は油素紙に墨書し、朱書にて陳彦廉本との異同を校補してゐる。碑文の旁には、小字にて他本との校注が詳細に記入されてゐる。恰も翁氏の「孔子廟堂碑唐存字」に相當するものである。前に、陳本の「化度寺碑」四字二行に書かれた篆題の模寫があり、嘉慶五年の翁方綱の長跋があり、その他、翁書の「翻化度寺碑己酉十二月嚮揚」とある題籤や、題跋の草稿と思はれるものが二三合装されてゐる。後に、潘祖蔭跋、同治甲戌歙の鮑康跋、丙辰無錫の許同莘跋がある。翁氏の長跋は復初齋集にも載せられず、これによつて王、陳、穆三本の詳細が始めて明らかになるもので、この點から考へて貴重な資料である。全唐文

嘉慶十九年欽定全唐文に收められてゐる碑文は、唐拓本を基とし、宋翻本等で校讐したものゝやうで、王孟揚本に近く、翁氏碑圖と比較すると、全唐文では「文」を元に、「弘」を去に、「于」を於に、「展禮」の展を瞻に作つてゐるのと、「信行禪○○脩」の二缺字が全唐文では一缺字になつてゐる點が異つてゐる程度である。全唐文の據り所がよく解らないが、翁氏碑圖は全唐文より十

數年早く嘉慶五年に完成してゐるから、全唐文の編纂には參考されない筈はないのではなからうか。但し、翁方綱の晩年の化度寺碑の一跋に、さる所に全唐文を所蔵してゐる人があつたので、友人に託してその碑版の部分を調査してもらつたが、この碑文は無かつたと記してゐるのは、何か調査の誤であらう。

八瓊室金石補正、陸增祥撰、劉承幹校刊本

卷三十に吳荷屋の筠清館金石記所載の全文を収録し、陸氏が校記を加へてゐる。吳氏の釋文はしばらくこれに據ることとした。

續高僧傳卷二十三僧昌傳

この傳は李百藥の撰した化度寺昌禪師塔銘の文を基にし、多少手を加へて作られたもので、碑文の校訂にはもつとも役立つものである。（神田、矢吹兩博士論著参照）

翁氏化度寺碑全圖校字記

上にかゝげた諸本をもとにして翁氏化度寺碑全圖の校訂をこゝろみ、次に行ごとにその校記をしるすこととする。

第四行「大慈」陳本、日本本皆同じ。王本、全唐文、八瓊室は皆「慈」字の下は一字を缺く。敦煌本もこの字は右大半が缺けてゐるが、「廣」字に讀むことができる。

第十二行「法<sup>〇</sup>之微妙」顧本、楊本皆同じ。「シ之」二字は唐石の斷缺所に當つてをり、王本、日本本には皆この二字を缺く。八瓊室は「法〇之微妙」に作る。成親王臨本および全唐文は「法海之微妙」に作る。成親王臨本を臨して、「海」字を讀み取つたものと思はれる。全唐文の典據はよく解らないが、宋翻本によつて「海」字を定めたのであらう。

第十三行「禪慧通<sup>〇</sup>」王本、日本本、全唐文、八瓊室皆缺一字。續高僧傳により「靈」字を補足すべきである。

第十四行「鑿溢區中<sup>〇</sup>親暗投」王本、日本本、全唐文、八瓊室皆一字を缺く。この字は「瞻<sup>〇</sup>親」又は「一<sup>〇</sup>親」等とすれば意味は通ずるであらう。

第十五行「五<sup>〇</sup>亭<sup>〇</sup>念」王本、日本本、全唐文、八瓊室皆一字を缺く。續高僧傳により「四」字を補足すべきである。「亭」字は各本同じであるが、續高僧傳は停に作る。

第十六行「平齊像<sup>〇</sup>往<sup>〇</sup>林<sup>〇</sup>慮<sup>〇</sup>入<sup>〇</sup>白鹿深山」王本、全唐文皆同じ。陳本は「平齊像〇〇〇〇入白鹿深山」に作り、日本本は「慮」字と「入」字の間に小泐痕があり、八瓊室は「平齊像〇〇〇〇乃入白鹿深山」に作る。又、續高僧傳は「平齊像法壞壞又入白鹿深山」に作る。「往林慮」三字は唐石の三斷裂の分岐點に當つてをり、王本では前



行に「往林慮山」四字がなくてこの行に「往林慮」三字があり、陳本では、前行に「往林慮山」四字があつてこの行に「往林慮」三字が無いところから見ると、この行の「往林慮」三字は、本来前行にあるべきものが、剪装の際にこの行に誤入したものと解せられる。日本傳本および翁氏碑圖において、前行に「往林慮」とある上に、更たこの行に「往林慮」三字があるのは誤であらう。因つて、翁氏碑圖のこの行の「往林慮」三字を取り除いて、その代りに續高僧傳により「法璽」三字を補足すれば、文意も通ずることとなる。因に、陳本においては、「像」字下の一字は残缺し、「法」字の上半が微しく見えてゐる様に解せられる。又、八瓊室には「入」字の上の「乃」字があり、續高僧傳には「又」字がある。文章の句法から言へば、この一行においては行末の一空格は必要なく、前文を繰り下げてこの空格を無くした方がよい。そのためにはこの「乃」又は「又」のいづれかの文字がここでは生かされる方がよい。吳荷屋が「乃」字を入れてゐるのは、本づくところがあるであらう。

「沈石漱流斤」○王本は「流」字の下に一残字、あたかも丘字の上半の如きがあり、その下の一空格はなく、直に次行の「巖」字に續く。陳本にはこの一残字がない。

日本本は「沈石漱流山巖之下」に作る。全唐文、八瓊室は「沈石漱流○巖之下」に作り、「流」字の下は皆一字を缺く。日本本の「山」字は前行に隣接した「山」字を借りて来た疑ひがある。一残字はやはり「丘」字ではなからうか。そして行末の一空格は、これもやはり、前文を繰り下げて無くした方が文章の句法も正しくなる。

第十七行「羅裳辟帶唯蕤之衣」全唐文、八瓊室皆同じ。王本は唯之二字なく、陳本は之字なく、日本本は蕤字下の一缺字がない。之字は文章の對法から考へて正しい。帶字下の一缺字は「被」字又は「着」字ではなからうか。行末「百」字下の一缺字は、續高僧傳により「卉」字を補足。

第十八行「焚香讀」○「讀」字の下は、王本、全唐文皆二字を缺く。日本本は缺一字。八瓊室は缺三字。續高僧傳により「誦輒有」三字を補足すべきである。

「青鸞之驪」全唐文、八瓊室皆同じ。王本、日本本は皆「之」字なし。鮑本、楊本は皆「之驪」二字がある。「之」字は碑の斷缺に當つてゐるが、前後の對句の句法からこれが「之」字であることは疑を容れな。

第十九行「俱絶倚」王本、日本本、全唐文、八瓊室皆一字を缺く。これは恐らく「依倚」であらう。

「畢來俯伏」王本、全唐文、八瓊室皆同じ。日本本は「俛伏」に作る。

「銀如恭敬」王本は「銀如○敬」陳本は「銀如○(殘)敬」に作り、全唐文、日本本は皆「貌如恭敬」に作る。八瓊室は「懇如恭敬」に作るが、但し校注には懇は貌に作るべしと云ふ。翁本には「恭敬」二字があり、顧本、楊本には「如恭敬」三字がある。鮑本は「如恭」二字は殘缺して明らかではない。續高僧傳は「貌如恭敬」に作るが、但し、一本には「慕」を恭に作り、又、「心疑聽受」の疑を疑に作る。(三階教の研究参照)

「弘」釋教、王本同じ。日本本、全唐文、八瓊室皆「弘」を宏に作る。「弘」字が正しいであらう。缺字は續高僧傳により「闍」字を補足すべきである。

第二十行「子時」王本、翁本、顧本、陸本皆同じ。鮑本は「于」字に近い。日本本、楊本、八瓊室は皆「于」に作る。全唐文は「於」に作る。「于」が正しいであらう。

各本皆缺文となつてゐるが、日本本には「深」字があり、而もそれが續高僧傳と一致するのは、日本本の系統の正しさを示すものである。

「爲玄門之益」○以道隱○王本、全唐文、八瓊室皆「益」字の下は一字を缺く。日本本は「益」字の下に缺字がなく、「以」字に續く。「益」字の下の缺字は「稜」字であらう。碑圖は「隱」字の下に一空格があるが、王本、日本本、全唐文、八瓊室、續高僧傳皆「道隱之辰」に作り、次行の「之辰」に直に續く。これは文章の對句の法から言つて、「隱」と「之」の間に一空格を置くことはできない。この一空格は、前文のどこかに一字を補足して無くすべきである。日本本は「于時」の下に洩痕があり、潘本は「明」字の下に一缺字があり、この間に尙一字あつたとも考へられるし、又王本等では「益」字の下の一缺字が二缺字であつたとも考へられる。

「大轉法輪」王本、全唐文、八瓊室皆同じ。日本本は「轉」字を啓に作る。

第二十一行「善其身」王本、日本本、全唐文、八瓊室皆同じ。續高僧傳により「獨」字を補足すべきである。

第二十二行「信行不」○「脩苦行」陳本同じ。王本は禪字

を缺く。日本本は「信行禪師修苦行」に作り、全唐文は「信行禪師修苦行」、八瓊室は「信行○○修苦行」に作る。續高僧傳に「乃出山與行相遇同修正節、開皇九年」とあるのによると、これは「信行禪師同修苦行」に作るべきであらう。

第二十三行「信行禪師○○之○○持徒衆」。全唐文、八瓊室皆同じ。王本には「之」字がない。日本本は「信行禪師持○○徒衆」に作る。碑圖は「之」字を何に本づいて補つたか不明である。續高僧傳に「及行亡(一)に之字に作る」歿世綱總領徒衆甚有住持之功」とあるのによると、原文を意味の上から補へば「信行禪師亡歿之後住持徒衆」となるであらうが、確實な文字は解らない。日本本の「持」字の上に「之」が残存してゐるのは、或は「住」字の上半ではなからうか。

第二十四行「崇敬○○」。全唐文、八瓊室皆同じ。王本は「敬」字の下は一缺字で、二缺字ではない。日本本は「崇敬○帛道福」に作り、缺文一字と贈字がない。續高僧傳により、「崇敬情深贈帛」に作るべきであらう。

第二十五行「奉送靈塔於終南山下」。全唐文、八瓊室皆同じ。王本は「送靈塔」三字がなく、「奉」字と「於」字の間に缺文八字がある。陳本は「於」字の上に小「口」

字がある。日本本は「奉○於終南山」に作る。翁本、顧本、陸本皆「奉送」二字があり、鮑本には「奉送靈○○」四字があり、楊本には「奉送靈塔」四字がある。「送靈塔」三字は碑の断裂に當つてをり、翻刻の際に補葺したものらしい。恐らく次行の「靈塔」二字を借りたのであらうが、これでは文意が通ぜず。これは、續高僧傳に「奉靈魄於終南山」とあるにより「奉送靈魄於終南山」とすべきであらう。

「徒衆收其舍利」、王本同じ。潘本は羅跋によると「徒衆等收其舍利」に作り、艸冠の一殘字は「等」字になつてゐる。日本本は「徒衆○其舍利」に作り、全唐文は「徒衆收其舍利」、八瓊室は「徒衆○收其舍利」に作る。續高僧傳は「徒衆收其舍利」に作る。これは潘本に従ふべきであらう。

第二十七行「雖託跡禪林遊心定水」。八瓊室同じ。王本、全唐文は皆「遊心」を「避心」に作る。王本は更に「雖」字がない。日本本は「雖避託跡禪林遊心定水」に作る。日本本の「避」字は衍字であらう。碑圖の「雖」字は何に由つて補つたかよく解らない。翁方綱は「遊心」を正しいとしてゐる。

「有待之累」萬形巖穴、王本、全唐文、八瓊室皆同じ。

日本本は「累○形巖穴」に作る。王本の「累」字の下の一缺字の部分には、缺壞の剝痕が明細に圖示されてゐる。

第二十八行「樊汚」。王本は「汚」字に作り、翁氏が校正して「汚」字としてゐる。日本本はこの字は漫漶して不明である。全唐文は汚に作る。八瓊室は汚に作り、疑ふらくは汚の誤といふ。

第三十一行「遊○○正德潤慈雲」。王本、全唐文皆同じ。陳本は「正德」二字がない。日本本の銘の部分は補葺を誤つた所があるやうで、文脈も亂れてゐるから、校勘に役立たない。八瓊室は「○○○正德潤慈雲」に作る。

「雲鏡」。王本同じ。全唐文、八瓊室は皆「鏡」字の下に一字を缺く。  
第三十二行「蒙悟道」。翁本、陸本、全唐文、八瓊室皆同じ。羅振玉の校記に、「蒙」を「蒙」に作るべしといふ。今、翁、陸二本を驗するに、必ずしも改めなくてもよいやうである。

「禪○○」。觀靈三昧、全唐文、八瓊室皆同じ。王本は「禪」字下に缺文が四字あるが、四言の銘文から考へて、やはり三字が正しい。  
「結構」。全唐文同じ。王本、八瓊室は皆この二字を缺

く。陳本はこの二字があるが「構」字は殘缺してゐる。  
第三十三行「去茲○○絕有憑」。王本、全唐文、八瓊室皆同じ。

「風火○○」。全唐文、八瓊室皆同じ。王本は「火」字と次行の「人」字の間に四字を缺く。

第三十四行「刹那自○○淨域○○」。○○樂。王本には「那」字がない。陳本には「那」字がある。那字の下字は殘缺して不明である。全唐文、八瓊室皆「那」字の下に二字を缺き、「域」字の下に五字を缺く。

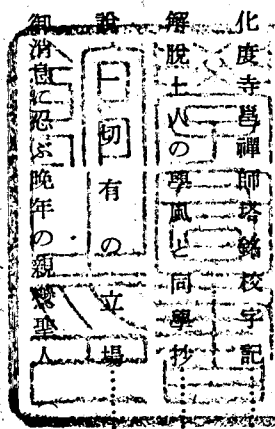
尚、日本本の帖末に「貞觀五年十一月十六日」の年記一行があるが、日本本の銘の部分は補葺が甚しく、年記一行は本文の文句と重複し、原石拓本にあつたものかどうか疑はしい。翁本の帖尾にも同様の年記一行があるが、これは本文の文句を取つて、帖末に移し、且つ「貞」字は第三十四行「眞宅」の眞字の漫漶したのを誤つて接装したもので、これについては翁氏の詳しい考證がある。

(昭和二六・四・八)

今年秋十月、右の校字記を基とし、拙筆を揮つて化度寺碑一本を全臨し、翁氏の舊に倣つて唐原石三段断裂の碑圖を作成した。この一文は作成した碑圖と相資するものであることを追記する。(昭和二六・一二・二〇)

# 大谷學報

## 第三十一卷 總目次



化度寺昌禪師塔銘校字記	中田勇次郎	一頁
解脫土人の學風と同學抄	富貴原章信	一〇三
一切有の立場	櫻部建	一四〇
御消息に忍ぶ晩年の親鸞聖人	鷲山樹心	一四〇
鷲外の「歴史小説」	大庭米治郎	二一
「興津彌五右衛門の遺書」と「阿部一族」	舟橋一哉	二二
俱舍論の教義に關する二三の疑問	鷲山樹心	二四
— 深浦正文著「俱舍學概論」を読む —	名畑應順	二五
御消息に忍ぶ晩年の親鸞聖人 (三・完)	諫訪義讓	二六
稻葉圓成先生を憶ふ	濱田耕生	二七
稻葉圓成師の渡支		
稻葉圓成先生略年譜及び論文著述目錄		

78 119